

俳句教室

令和四年度学園祭展示作品



参道に児の泣き声や獅子舞来

高間 恭子

今年のお正月、近くの神社へ初詣に行き、列に並んでいると、急に前の方から泣き声が聞こえてきました。何かと見てみると、列の間に獅子舞が回っていて、驚いた幼児達が母親にしがみついて泣いていました。何か懐かしいほのぼのとしたものを感じました。

志は高く善くあれ菜の花忌

田中 京

菜の花忌は司馬遼太郎の忌日。司馬遼太郎は明治時代、日本の明るい未来を目指して高い志を持って生きた若者達を史実に基づいて描いた「坂の上の雲」や「竜馬が行く」等の著者です。私は善良で高い志を持って生きることが、何歳になっても大切なことだと思っています。

冴返る青一色に富士の白

佐藤 芽衣

珍しく雲一つない青空の日、ふと富士に目をやると昨夜雪が降ったのか、真っ白に輝いて見えませんでした。心まで晴れ渡り良い一日をいただきました。

笛の音の月下に流れ冴返る

小林 かづ

曾つて観た映像からのイメージです。戦に敗れた若武者が、崩れかかった石垣に凭れて笛を吹くと、雲間より月がその秀麗な横顔を照らしました。奏でる音色と青白い月光。夜気が冴返るようです。

膝に抱く子猫の爪の薄さかな

松坂 麗子

猫が好きで今回五匹目を飼っています。子猫のうちは何とも言えずかわいいです。膝に抱いていると子猫の爪がすごく薄く、爪を切る時がとても危なくて怖く感じます。

猫の子や動くものみな振り返り

中嶋 がりゆう

ある雨の日、母が子猫を拾ってきました。エルと名付けられた子猫は、いろんな愛らしい姿を見せてくれました。その中でも、動くものを見る時のじゃれ方は、初めて猫を飼った私達には、とてもかわいい発見でした。

独り居て作句に浸るリラの花

羽鳥 ゆき

ある日、ゆっくりと俳句作りに向き合いました。「季寄せ」を読んだり、言葉を考えてたり。学生時代に戻ったような時間を過ごせました。何とか一句出来、窓の外を見ると、斜め向かいの家の前に、何とも美しいリラの花を見つけ、とても幸せな気分になりました。

遠山に雲ひとつありねぎ坊主

西村 えつ

私は、栃木県の農村で生まれました。冬は田も畑も空っぽになるような静かな村です。畑の片隅に自分の家で食べる野菜を作っていました。その中の長ねぎは、茎の先に丸い花が咲き、春になるとねぎ坊主と呼ばれる玉になります。その光景を俳句にしました。

光背を纏ひて目醒む水芭蕉

武田 正輝

朝の陽射しに咲いた水芭蕉が白黄に輝き、まるで仏様に後光が射しているようでした。水に反射して神々しく清廉で美しいその姿は、光背を着て朝の光に現れた神のように感じられた瞬間でした。

砲煙は新緑の原掻き消しぬ

安部 洋輝

二月二十四日ロシアがウクライナに侵攻した。ウクライナの抵抗が想定以上に粘り強く、今だ戦闘が続いている。TVの映像でウクライナの大地にロシアの砲撃が続き、大草原とひまわりで有名な景色が掻き消されていくのを見て、ロシアが撤退することを祈った。

遙か指す志士の気魄や青嵐

吉原 さち

吾妻橋の辺に高々と建つ勝海舟の像。向かい風の中で強く指差す彼方は、穏やかで平和なこの国。幕末から明治の激動期、押し寄せる艱難辛苦に決然と立ち向かい、信念を貫いた気魄がひしひしと伝わってきます。

薄暑光朱あざやかな五重塔

丸山 ふみ子

五月下旬浅草へ吟行で行きました。何回も訪れている浅草ですが、川を渡ったことがなく、勝海舟の像を初めて見ました。観音様に帰り境内をぶらり。ふと見上げると、初夏の光が朱塗りの五重塔を色鮮やかに照らして、美しく見事でしたので詠んでみました。

このままで終わらぬ余生桐の花

塩崎 みつえ

突然コロナが流行し、ステイホーム、オンラインを余儀なくされ、旅行やコンサートの中止、友人や親兄弟にも会えない数年間でした。老いてゆくのが目に見えるような我が身。以前のように希望ある時代に戻ってほしいと願う句です。

落ちてなほ気品漂ふ沙羅の花

斎藤 文

六月十日、自然公園の小さな夏椿の木に十輪の花が咲いていました。実に美しい！翌日は小雨でした。雨が止み、昼頃公園に行きました。昨夜咲いていた十輪すべてが地面に在りました。その美しさは、木にある時と微塵も変わらぬ気品ある美しさでした。

古の佛の笑みや合歓の花

大矢 幹夫

上野の東京国立博物館の東洋館で石佛鑑賞後に本館裏の庭園を散策した折に、合歓の花に出会った。合歓の花は古の佛のアルカイックスマイルに正にフィットしたイメージであり、この句が口をついて出てきたもので、花言葉の「やすらぎ」そのものであった。

少年は母の丈越え立葵

森戸 謡

久し振りに逢った孫が急に背が高くなり、母親を越えているようでした。丁度外には立葵が暑さの中で上へ上へと咲き登っているのが見えました。あの立葵のように真つすぐに、きれいな心で成長していつてほしいと願いながら二人を眺めました。

道譲り踏む夏草の香り立つ

横須賀 智

筑波山頂からの眺めを堪能した後、狭い山道を下って行った。これから登って行く人達とすれ違う時、私は山側に体を寄せて止まった。登山靴の下から名も知らぬ草々の香が立ち上がってきた。その爽やかな香にああ夏だなあと感じ入った。

雲の峰眼下に白く輝きて

谷川 よし

七月に、三男の勤続三十年のお祝旅行に、親子で北海道に行つて来ました。家を出る時は大雨だったのに、羽田を発つ時は小雨。雲を抜けて十分ぐらいいしたら、上空は夏空で入道雲が一面に。今でも忘れられないひと時でした。

身をくねりトゲの山立て路地胡瓜

山本 美子

夏の日差しを受けて生き生き育つ露地栽培の胡瓜。青々と身を曲げて、手が痛むほどのトゲを立てる路地胡瓜の力強さと勢いを詠みました。

胡瓜揉む耳はニュースを聴いてをり

長谷川 洋子

リビングから聞こえてくるテレビのニュースを、いつも夕飯の支度をしながら聞いています。何気無い日常を、大切に感じます。そんな日常を句に詠んでみました。

満月や悠悠と生き逝きし人

熊崎 知恵子

夫が亡くなり三年が過ぎました。一区切りにと詠んでみました。常に努力の人でしたので、余裕をもって生きていたと感じました。人生半ばで病気になるりましたが、病気にも負けず、定年後さらに五年も勤め上げました。私からのプレゼントは感謝状です。

石垣に色を零して蔦紅葉

長澤 とうこ

この句は四年位前に幼なじみと近江を訪れ参道を歩いていたら時、紅の絵の具を零したように紅葉した蔦の葉が、石垣一面を覆っていた美しい光景と出会い、その様子を思い出して詠みました。

一斉にマスク外して合唱団

浅賀 郁子

昨年の十二月五日に、友人に誘われアマチュア合唱団の演奏会に行きました。肅々と入場し、正面を向くと一斉にマスクを外し、演奏が始まりました。ピアノ、ハープ、ヴァイオリン、サクソも順番に加わり、変化に富む素敵な演奏会でした。

雪吊りの松従へて塔聳ゆ

西野 信

昨年度の俳句教室の吟行会は、九月末の上野公園に続き十二月九日の目白の椿山荘でした。アップダウンの多い庭園を歩きましたが、季節柄雪吊りを施した複数の松が、上方の堂宇を支え持ち上げているように見えたので、この句を詠んでみました。

残照に妖怪となる冬の雲

新井 朋子

あの日は風の吹く日でした。雲を見ていたらふと、子供が幼い時、雲に妖怪の名前を付けていたのを思い出して書いてみました。

小夜時雨スカイツリーの青に消ゆ

藤田 笙

冬の夜、小雨が降ってきたので、ペランダから外を見ると、スカイツリーが青くライトアップされていました。美しさを目を奪われていたところ、時雨が青い輝きの中に消えていった様子を詠みました。

